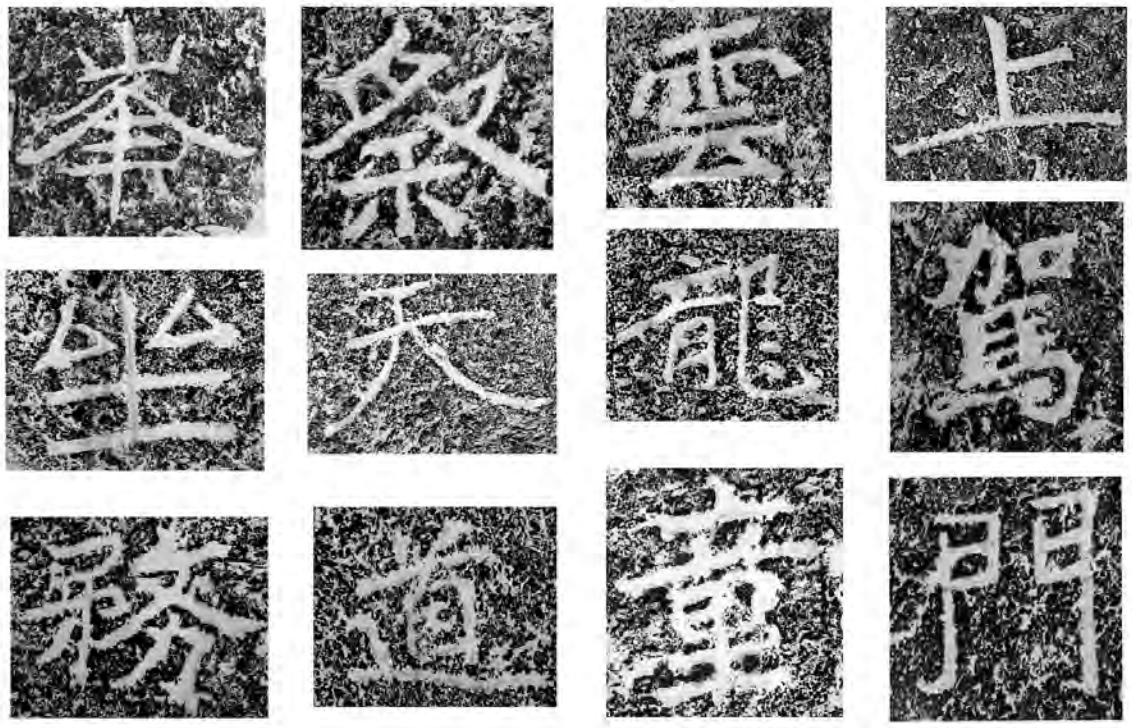
主図版① 鄭羲下碑（部分、やや縮小）

「書の古典観照」④
「六朝楷書」・①鄭道昭

図版②　鄭道昭の各種の碑刻・題字からの集字



北魏の楷書碑は、明治時代の初期に来日した楊守敬（ようしゅけい 1839～1915）によって、日本の書道界に紹介された。『龍門造像記』や鄭道昭の書と伝えられる摩崖（山の岩肌）に刻された『鄭羲下碑』を始めとする『雲峯山摩崖刻石』は、当時の書壇の人々には未知の書であり、日下部鳴鶴を中心とする一部の人々に伝えられ、次第に広がり、習う人も多くなっていった。明治末から大正、昭和にかけて、北魏の多くの楷書碑を中心として甲骨、金文などの篆書、多種の漢代の隷書碑等が書の古典として学ばれた。戦後もその傾向は廃れることなく、益々盛んである。その中にあって、鄭道昭の摩崖碑の書は、規模が大きく、雄大であり非常に魅力ある古典の一つとされている。中国においても清朝後期から盛んに取りあげられ、包世臣（ほうせいしん 1775～1855）等が、逆入平出（起筆を左下から上に回して打ち込み、収筆を右下に出す）の筆法で独自の書風を作り出した。また清朝の康有為（1858～1927）は、北魏の書を評して、『龍門造像記』を方筆の、『雲峯山摩崖刻石』を円筆の最たるものと称した。「方筆」は起筆や転折が角張り、「円筆」は、その反対で丸みを帯びて柔らかな点画をさす表現である。『雲峯山摩崖刻石』の中でも特に『鄭羲下碑』（図版①）の文字の点画は、起筆や転折が、角張らずに丸みを帯び、柔らかな筆致の最たるものであると評している。こうした見方は、現在の書壇においても受け継がれている。今回は、鄭道昭の書の中に見られる「円筆」を取りあげよう。上段には鄭道昭の各種の碑刻の集字した文字を並べた（図版②）。右の『鄭羲下碑』とを比較して見てください。

伊藤滋（書斎名・木鶏室）

書道芸術院
平成の群像（2018）

有野琤扇

「甲骨文字からトンパ文字へ」

最近よく質問されることがあります。「これは甲骨文ですか。トンパ文字ですか。」ここに掲載した書は第70回記念書道芸術院展のものです。院の繁栄を願って甲骨文の〝繁〟を書きました。よく見るとトンパ文字の雰囲気があります。

第70回記念書道芸術院展「繁」　有野琤扇書

竹扇会では、30年以上も前、師小伏竹村先生のご指導のもと甲骨文の研究が始まりました。3300年以上も昔、亀甲や獣骨に卜占（ぼくせん）の記録として刻されたものです。その鋭い線、造形の面白さに強くひかれていきました。多くの文字が歴史の中に消えていく中で、唯一甲骨文が現在の漢字の中に今も生き続けていることを知りました。その時の衝撃を忘れることができません。勉強を続けるうちにこの不思議な生命力を持つ甲骨文で作品を書き、個展をしたいと思うようになりました。2006年、テーマを「宇宙からのメッセージ」として、生命の起源である『BIG BANG』を始め、『天地創造』『森羅万象』など甲骨文特有の鋭い線で書作しました。それを見に来てくれた旅行好きの知人が「中国にはこんな面白い文字があるよ。」と紹介してくれたのがトンパ文字でした。今ではユネスコの世界記憶遺産に登録されています。一見漫画チックにも見える象形文字です。中国の奥地に住む納西（ナシ）族に今も使われているという。人々の生活の風景や民族のアイデンティティが生き生きと伝わってきます。このシンプルで楽しい文字を書で表現できるだろうか。初めて書いた文字を見た先生に「なんじゃ、これは?」と一蹴されました。この時から私の挑戦が始まりました。書作に行き詰まった時、先の個展で感じた甲骨文の可能性を思い出しました。英語の文字を甲骨文で書いた時、甲骨文は文化の垣根を越えて他の文化と融合することができると感じたことでした。それに気付いた時から作品作りの発想が広がり始めました。「トンパ文字をとことん追求したら?」と師の言葉が背中を押してくださいました。トンパ文字の故郷、中国雲南省の麗江にも足を運びました。そこは日本の田舎に似た懐かしい風景が広がり、素朴な人々が生活を営んでいる水の美しい村でした。そんな人々に想いを馳せて書いた「トンパの世界」で2011年に2回目の個展を開くことができました。

甲骨文は、文字の形と言葉の意味を同時に表現できる優れた文字です。私にとっては作品づくりの発想を無限に広げてくれる宝庫です。

書のひろば

理事長　辻元大雲

第70回記念毎日書道展開幕
企画展「墨魂の昴」も盛況

70回目の記念展を迎えた毎日書道展は5月の鑑別、6月審査、更に会員賞・文部科学大臣賞選考と順調に運営され、7月11日から国立新美術館で開幕、19日からは東京都美術館で開催される。注目の文部科学大臣賞には漢字部日本書道美術院理事長の鬼頭墨峻氏が受賞した。

本院関係の主な受賞者

・会員賞　岩垣若翠（漢字・鳥取）
　九條純代（かな・群馬）
　柳橋香仙（前衛・千葉）
・毎日賞　高岡秀汀（漢字Ⅰ・広島）
　竹浪叙舟（漢字Ⅰ・千葉）
　高安翔琴（漢字Ⅱ・大阪）
　利村郁子（かなⅠ・群馬）
　山田静枝（かなⅡ・群馬）
　井上雲開（近詩・千葉）
　浅利雪蘭（近詩・青森）
　桐岡銘紀（近詩・千葉）
　佐藤弦佳（近詩・宮城）
　保原美風（大字・大阪）
　松村美保（大字・奈良）
　佐藤紫水（刻字・宮城）
　青木かよ（前衛・群馬）
　木暮千晶（前衛・群馬）
　相内珠莉（前衛・青森）
・U23毎日賞
　茂木絢水（かなⅠ・宮城）
　伊藤二千翔（前衛・青森）
・秀作賞　31人　・佳作賞　65人
・U23新鋭賞　1人
・U23奨励賞　5人　受賞者計122名
・70回展記念功労者表彰（本院関係）
　小伏竹村、香川倫子、浜谷芳仙、飯高和子、砂本杏花

「墨魂の昴」企画展示は国立新美術館にて通期で開催された。会期中理事によるギャラリートークが行われ、7月18日に辻元大雲が担当した。

表彰式は7月22日、ザ・プリンスパークタワー東京にて2500名余の参列者で盛大に挙行され、70回記念功労者表彰、毎日書道顕彰3氏への贈呈に続き会員賞以下各賞が贈呈された。

祝賀懇親会は例年に増して盛大で記念展にふさわしい盛り上がりを見せた。

書道芸術院の出品者懇親会も同日17時より芝パークホテルにて200名余の参加者で盛況。ご来賓は毎日新聞社徳増様、三岡様、毎日書道会専務理事西村様はじめ多数参加いただき感謝。

東京展の後、全国9会場の地方展が開催される。ご協力ご支援をよろしく。

毎日書道展70回記念鳥取巡回展
集中豪雨被害の中開幕

7月7日毎日書道展70回記念役員作品巡回鳥取展が折からの集中豪雨の最中開催された。前日6日に担当理事として羽田空港をなんとか飛び立ち、巡回展事務局長を務められた名越蒼竹本院理事の出迎えをいただき会場へ。7日の開幕式、作品解説会は集中豪雨の影響で参加者は半減、主賓の鳥取県知事は災害対策本部長として動けずご欠席となった。

しかし会場は鳥取県立博物館の展示会場に全国巡回役員作品会場64点と地元中国地区（広島・岡山・島根・鳥取）4県の一般公募推薦作品を含め300点余が展示され充実。別会場のとりぎん文化会館では毎日書道展創設以来の代表作家の遺作、地元役員の小品が特別陳列され、同会場を舞台に席上揮毫も連日行われた。開会初日には担当の中村雲龍財団顧問が2作の揮毫を行った。

祝賀懇親会は当初160名余の参加者が半数以下の出席となり担当者は対応に大童であったが賑やかにまた楽しい会となった。

巡回展今後の日程・会場

・半田展（愛知県）8月18日～25日
　半田赤レンガ建物
・静岡展　9月4日～14日　静岡県立美術館・静岡市民文化会館
・群馬展　10月12日～17日
　高崎シティギャラリー
・佐賀展　11月21日～25日
　佐賀大学美術館
・旭川展　2019年1月19日～25日
　北海道立旭川美術館
・徳島展　2月11日～17日
　あわぎんホール
・新潟展　3月1日～6日
　新潟県民会館
・和歌山展　3月21日～24日
　和歌山県民文化会館

村野大仙先生お別れ会

本年5月22日にご逝去された本院顧問村野大仙先生のお別れ会が7月31日上野精養軒にて多くのご来賓、本院会員のご参列をいただき、しめやかな中に故人を偲んで和やかに行われた。会は二部構成で午後一時よりご来賓及び本院財団役員列席のもとセレモニーが行われ、献花に続き下谷洋子開会の言葉、お別れの言葉を辻元理事長、板垣洞仙邑門会代表、ご来賓を代表して毎日書道会西村修一専務理事が述べ、遺族を代表して村野博志様よりお礼の言葉をいただいた。その後席を移動して献杯を行い懇談へと進行し、その後一般献花を大勢の参列者に行っていただいた。ご冥福をお祈りします。

21世紀の書
―私の主張―

前衛書 (五)

大井美津江

書線の美について

「書は線の芸術である」と言われていますが、書のすべてが線によって形成されているからです。その書の線には、書いた人の感情や人間性が表現されるといいます。

書線には、直線的なものと曲線的なものがありますが、律動的で軽快か、重厚で力強い線であるかなど、あらゆる角度から見つめていくことが必要なのです。それらを身につけるために、（先月号まで述べてきましたが）古典の奥義をくり返し学ぶことが大切です。

甲骨文には、鋭く刻まれた線の魅力に引き込まれます。また六朝時代の造像記などは、全身全霊でひたむきに書きあげているパワーを感じさせ、心の高鳴りを覚えます。漢代の木簡も、純粋で伸びやかな線が光ります。顔真卿の書も一点一画の運筆が雄大で、かつ繊細で風格のある線です。中島邑水先生からも長年にわたり、顔真卿の書法を学びました。

線の抑揚、沈着、遅速、強弱、細太、墨色等に苦慮しつつ感動が伝わる書をめざしています。

「上野」（こうずけ）　大井美津江書

現代詩文書 (五)

小池蹊舟

室内を飾る書

―生活空間にアクセントを―

〈生活を彩る〉

現在の書作品は、美術館の広い空間に飾られるため、力強い主張のはっきりした作品が主流だと思います。以前のように、和室の床の間や応接間に飾られる作品は、住宅様式の変化もあり、少なくなってきています。

我が家唯一の和室の壁に色紙の軸をいつも掛けています。画でもよいのですが、書作品だとその空間が一段と引き締まる様に思います。

〈精神性がより強く〉

これは画よりも書の方が抽象的であるが故に、文字の骨格や筆勢を通して作家の精神性がよりはっきり伝わってくるからではないでしょうか。

茶道で使われる掛け軸は、僧侶の書かれたものが多いので、その気骨溢れる書が茶室の雰囲気を凜としたものにし、主客の心改まる一期一会の空間に馴染むのだと思います。

家の玄関や居間に書作品を飾ることで、心が豊かになり気持ちも引き締まり、日々の生活のアクセントとして楽しめるのではないでしょうか。

今回の掲載作品は第23回白扇会選抜展に出品したものです。扇面に書いてみました。

白鳥　小池蹊舟書

平成30年度 新審査会員作品

大橋 佑朋（現）・向井 翠窓（漢）・小此木白洋（前）・高原 紗秀（前）

大橋 佑朋
（山口）

「水甕（みずがめ）」

山田梓江先生は常々詩文書は題材選びが大切と言われます。沖縄を旅し、琉球王国より続く金細工の独自の手仕事による装飾品と、七代目匠の温かい詩に出合い心打たれました。沖縄と言えば赤瓦。赤茶系の墨で、純銀を打つようにリズミカルに書きました。

（佑朋）

小此木白洋
（群馬）

「希」

この度は、審査会員に推挙戴き心より御礼申し上げます。熱心にご指導下さる北村白琉先生、また白玄会の皆様のおかげです。今回、小作品に苦心しましたが、余白を生かし、動きのある作品を心掛けて書きました。

年を経てなお、書を学べる幸に感謝し、精進します。

（白洋）

向井 翠窓
（大阪）

「健」

審査会員昇格、誠にありがとうございます。これも亡き恩地春洋先生、小林琴水先生、石田春窓先生、書道芸術院の諸先生方のおかげです。

健やかにたくましく。我が子に対する願いをこめました。実は私もそのように育てられ、ご指導いただいておりました。書の世界は深遠です。

（翠窓）

高原 紗秀
（青森）

「進」

新たな一歩を踏み出す力強さをイメージし、書であらわしました。私事ですが、春に子どもを授かり、新生活を迎えた節目の年に審査会員へ昇格させて頂くこととなり、良い記念となりました。まだまだ力不足ではありますが、小さくとも歩みを進め続ける大切さを噛みしめ精進して参ります。

（紗秀）

平成30年度 新審査会員作品

田畑 明琴（漢）・坂本 蓉花（現）・森田 藤谷（漢）・畠中 成山（前）

田畑 明琴
（神奈川）

「自然」

亡き恩地先生、小林琴水先生のご指導と会の皆様のお力添えで書道を続けることができ、深く感謝致しております。

淡墨で「自然」を書きましたが、ふわっとしたにじみに苦労いたしました。今後は、墨色の研究に取り組んでいきたいと思います。

（明琴）

森田 藤谷
（千葉）

「啐啄同機」

もくせい会の門を叩き14年。筆・墨・紙・言葉、すべてが一期一会と思い書と向きあってきました。その時々に合わせて、熱心にご指導くださる半田藤扇先生はじめ諸先生方のおかげと感謝しております。

ここから新たなスタート。自分の心と向きあい、殻をつつき続けたいと思います。

（藤谷）

坂本 蓉花
（大阪）

「清新の気」

清新の気…。この言葉の様にいつも新しく新鮮で活気に溢れ、そして美しい作品を紡ぎ出される師、砂本杏花先生に師事させて頂きましてから早10年。今後も日々研鑽を積み、昇格の栄に恥じぬ様、益々精進してまいりたいと思います。

（蓉花）

畠中 成山
（宮城）

「Brilliance」

この度は審査会員にご推挙いただき、誠にありがとうございます。高校3年生の頃よりご指導くださいました嵯峨大拙先生に心より感謝いたします。

今後は古典の臨書にも更に力を入れ、書道史や文房四宝の研鑽に励んで参ります。

（成山）

平成30年度 新審査会員作品

佐藤 桂鳳（現）・吉永 沓花（漢）・木暮 千晶（前）

佐藤 桂鳳
（宮城）

「月見草神の鳥居は草の中」

詩文の世界を如何に表現するか。構成・字形・線質に思いをめぐらす日々です。

これまでご指導頂いた狩野翠桂先生はじめ、諸先生方への感謝と敬意を胸に、自分なりの書を極めていきたいと思っております。

（桂鳳）

木暮 千晶
（群馬）

「初」

私は高校に入学し、倉林紅瑤先生に出会い、書の道に入りました。現在は白玄会に所属し、活動しております。

作品制作には最大限の努力をしますが、まだまだ思うように筆が動かず、勉強不足を痛感します。これからも失敗を恐れず常に新しい表現を目指して精進してまいります。

（千晶）

吉永 沓花
（高知）

「聴」

深くて重厚な線や、筆の開閉によって生まれる躍動感のある作品を書けたらとの思いはありますが、それは臨書によって作られるものです。少しでも近づけるよう学書を重ねて行きたいと思います。

（沓花）

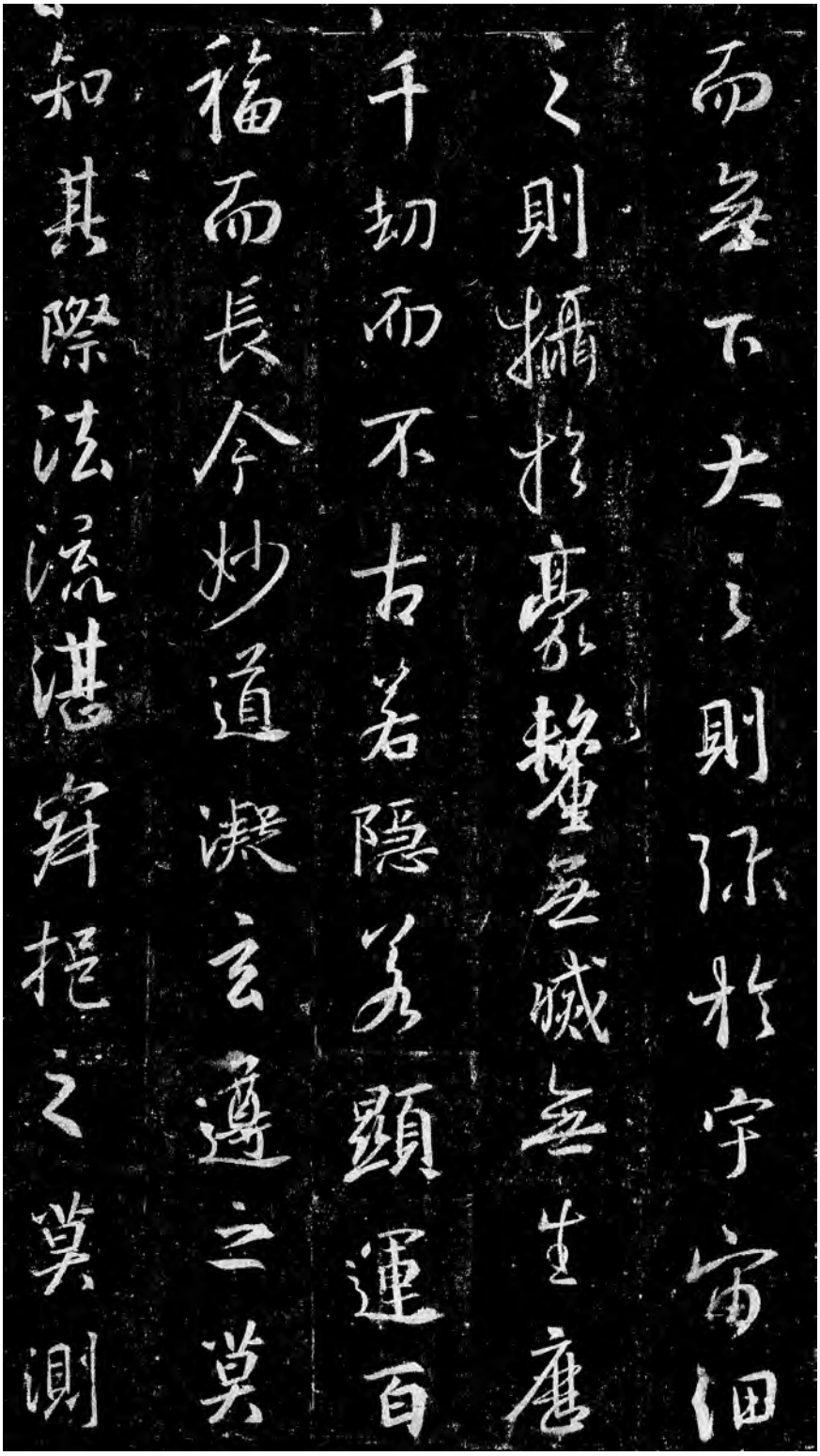
古典鑑賞 ㊴

集王聖教序　東晋　王羲之（唐・672年集字）②

漢字研究部臨書課題　＝（半紙普通判・縦使用）左記の法帖より何文字臨書してもよい。

特別研究部臨書課題　＝（毎日展公募サイズ以内・縦横自由）当該古典の左記掲載部分以外も可。

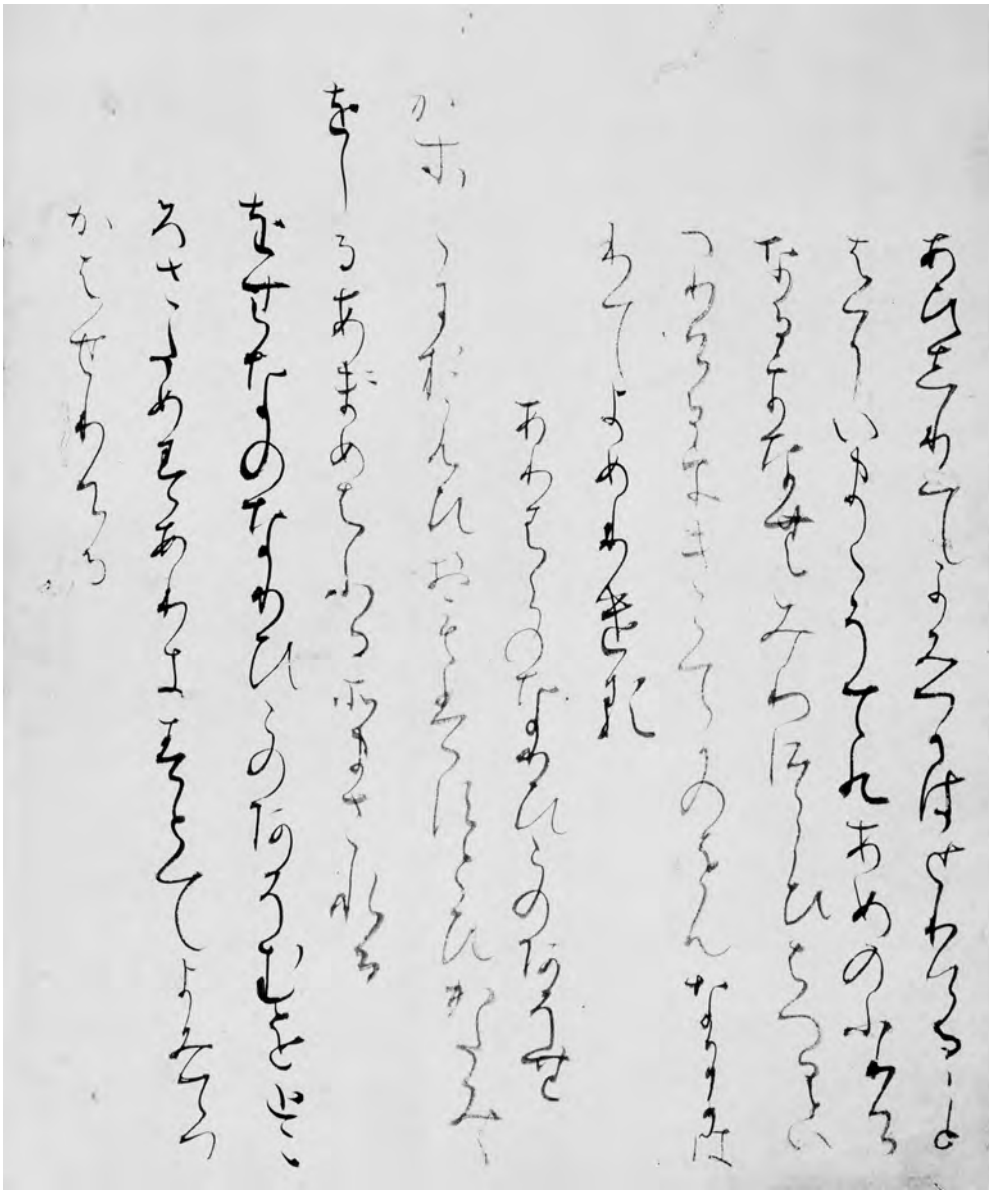
〈解説〉集王聖教序は、僧懐仁が20年余りの歳月をかけて宮中所蔵の王羲之の真跡から集字し刻した碑で、咸亨3年（672）に建てられた。懐仁は王羲之の書法をよく学んだ僧侶である。集字には蘭亭序、喪乱帖、奉橘帖、淳化閣帖などの集帖中の行書帖が用いられたとされ、なかでも蘭亭序からは50字ほど採っている。集めた文字の大きさを揃えるために縮小拡大をし、また王羲之の書にない文字は、遍と旁を組み合わせて作字が行なわれた。集字であるため前後の文字の気脈にやや欠けるが、用筆や結構の面では完成されたものをもち、王羲之の真跡に近いものとして尊重されている。（編集部）



而無下。大之則彌於宇宙。細之則攝於豪釐。無滅無生。歴千劫而不古。若隠若顕。運百福而長今。妙道凝玄。遵之莫知其際。法流湛寂。挹之莫測

（掲載図版72％に縮小）

※落款を必ず入れる。署名、もしくは○○臨（押印のみも可）



（個人蔵）

古筆鑑賞 ⑰③

関戸本古今和歌集（伝 藤原行成筆）②

〈よみ〉

あひしりて、ふみつかはせりけることばに、いまゝうでく、あめのふりげなるをなむみわづらひはべるといへりけるをきゝて、かのをんなにかはりてよめりける

ありはらのなりひらのあそむ

かず〳〵におもひおもはずとひがたみゝをしるあまめはふるぞまされをむなのなりひらのあそむをところさだめずありきすとて、よみてつかはせりける

※落款を必ず入れる。署名、もしくは○○臨（押印のみも可）

〈解説〉

関戸本古今集の筆者は零本末尾の中院通村（江戸初期の公卿・1588～1653）の奥書では、藤原行成（972～1027）筆としているが、それより後の11世紀後半のものと推定されている。

俯仰法を駆使した筆運びで、構えの大きなゆったりとした字形、抑揚のきいた張りのある線、自由で変化に富んだ連綿のリズム、潤渇自然のままに展開する墨継ぎの妙など、かなの美しさをいかんなく発揮しており、かなの技法としては最上位に位置するものの一つである。

（編集部）

※掲載図版は75％に縮小。

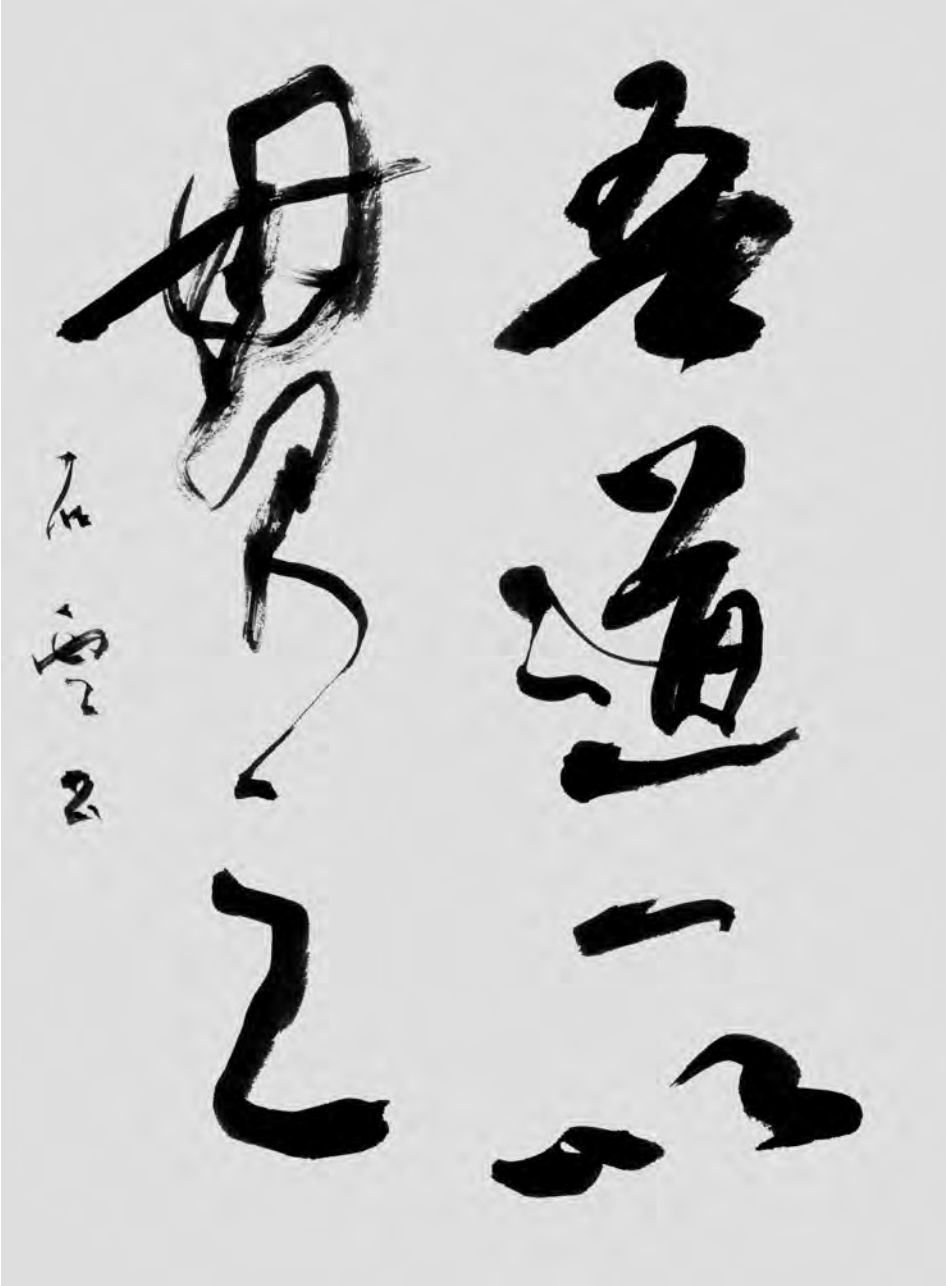
※古筆は原寸（以上も可）で臨書しましょう。

かな研究部 臨書課題	（半紙普通判（料紙可）・縦長に使用） 別紙を裁断して貼付も可。半懐紙は半紙サイズに切って使用のこと。 上記の古筆の掲載部分より歌一首以上を書く。（全臨も可）

特別研究部 臨書課題	（毎日展公募サイズ以内・縦横自由） 上記の掲載以外も可。

漢字規定　初段以上【九月十五日締めきり】　用紙　半紙普通判

小竹石雲選書



吾道一以貫之　よみ（吾が道は一以て之を貫く）

書体＝自由

習い方解説（五）

小竹石雲

吾道一以貫之（論語）
（吾が道は一以て之を貫く）

条幅などの作品展開を王鐸に求めてみた。

・一字一字と言うより全体でまとめる気持ちが大切。

・途中墨継ぎをせず一気に書ききることが必要。

・おもいきって文字の大小・太細の変化をつけてみた。

・気持ちをこめて筆が自在に運べると楽しくなってくる。

漢字規定 秀級以下【九月十五日締めきり】 用紙 半紙普通判

尾形澄神選書

色即是空　よみ（色即是空）

書体＝楷書

習い方解説（五）

尾形澄神

色即是空

（色即是空）　（仏語）

この世にある一切の物質的なものは、そのまま空であること。

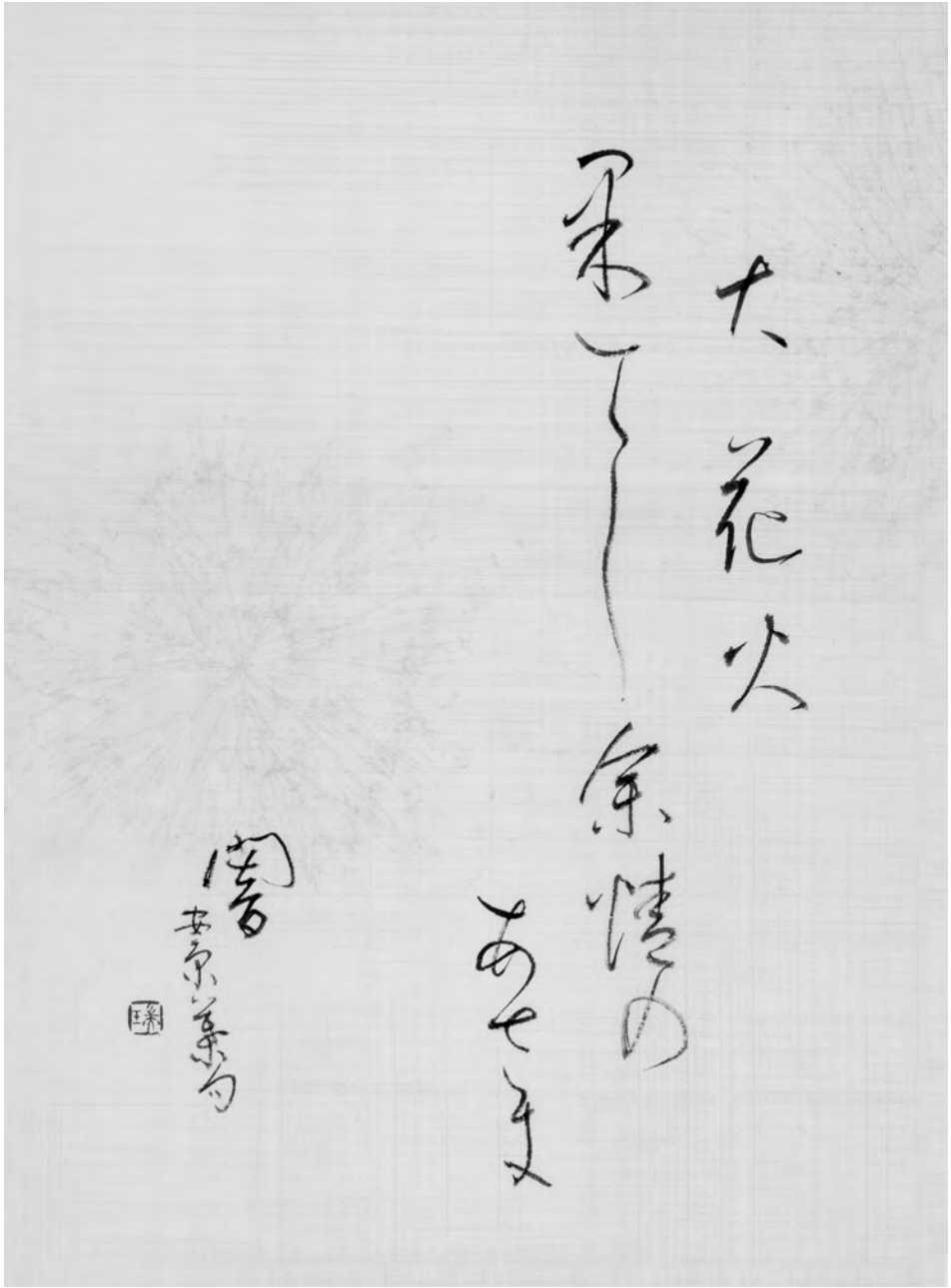
鄭道昭の諸碑を参考にし、自分なりの解釈を加え書いた。彼の書と伝わる鄭羲下碑は、円筆の楷書と言われるが、基本用筆は方筆である。永い間、風雨にさらされたため字画が丸味を帯びているが、本来の姿は方勢から成っている。ただ、六朝の造像記同様、転折に丸く折れるところがあったり、送筆に若干のうねりが見られることから、全体的に書風が柔らかく感じられる。方筆に円勢の筆意が備わっている、と解するとよいかも知れない。筆はずっと同じものだが、今回の用筆も蔵鋒による。

落款も同じ筆で書くことを自らに課すと、技量が高められる。

・円筆（丸みを帯びた筆遣い）
・方筆（点画が角張った筆遣い）

かな規定　初段以上【九月十五日締めきり】　用紙　半紙普通判（料紙可）

奥田瑞舟選書



よみ方　大花火果てし余情の浅(あさ)き(支)闇　安原葉句

創作

習い方解説（五）

奥田瑞舟

大花火果てし余情の浅き闇（安原葉の句）

俳句を素材として作品を創る時、季語がその季節感を出すための主役になります。作品表現では、かなと調和する漢字の書体で書くことが大切です。変体がなは最小限度使用することを心がけました。

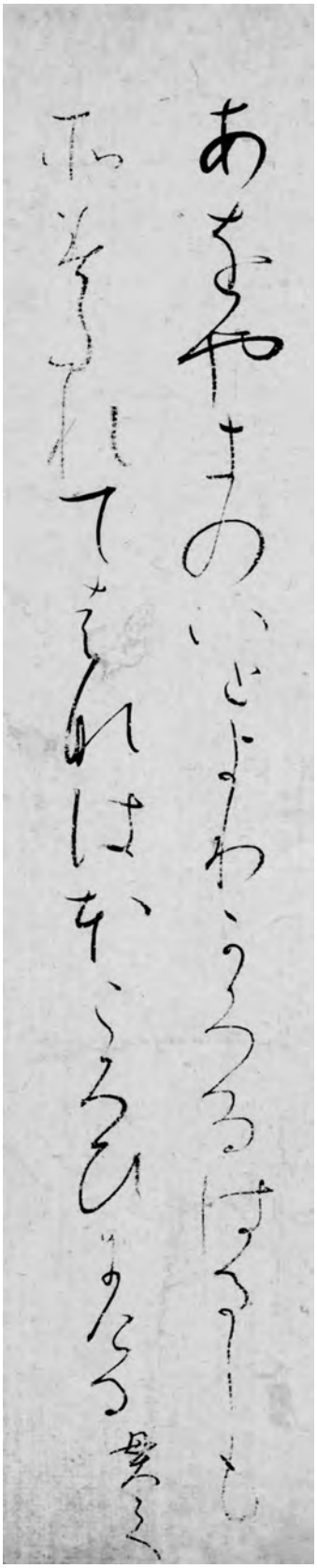
用紙は、筆の回転や筆の腹を使う（線に厚みが欲しい）場合、少し厚手の方が扱いやすいと思います。

筆の選択も大切です。今回は、いたち毛2.5㎝のを使いました。今使っている筆を離れて、堅い、柔かい、短い、長いなど、性質の違う毛の筆にしてみます。

羊毛の多い筆でゆっくり運筆して、味わいのある線情も魅力的です。筆を取り替える＝きっと驚くような可能性に遭遇するでしょう。

かな規定　秀級以下　【九月十五日締めきり】　用紙　半紙タテ1/2（料紙可）（たて32センチ・よこ12センチ）

掲載写真の和歌を臨書する。または部分（2字以上の連綿）を臨書する。



粘葉本和漢朗詠集
（掲載写真拡大111％）

よみ方　あをやぎ(支)のいとより(利)か(可)く(久)るはるしも
ぞ(所)み(美)だ(多)れては(者)な(那)はほ(本)ころびに(尓)け(介)る　貫之

習い方解説 (二)

小島孝予

蜩（ひぐらし）の鳴く山里の夕暮（ゆふぐれ）は
風よりほかにとふ人もなし
（読人しらず（古今集））

和歌の散らし書きです。「蜩」「山里」「暮」をひらがなに置き換え、文字数を増やすことで、散らし書きの構成がしやすくなります。そして、構成の上で大事なことは余白です。余白の動きによって、作品全体の景色が変わってくるのです。

かなの雅（みやび）な流麗さが表現できるよう、工夫して仕上げて下さい。

※タテ形式に限る

かな条幅規定　【九月十五日締めきり】　用紙　小画仙紙半切（料紙可）

小島孝予選書

よみ方　蜩(ひ具らし)の鳴く(久)山(やま)里(佐と)の夕暮(久禮)は(者)
風より(利)ほ(保)か(可)に(耳)とふ人もな(奈)し

創作

漢字条幅規定　初段以上【九月十五日締めきり】　用紙　小画仙紙半切

種谷萬城選書

張旭三杯草聖傳　脱帽露頂王公前　揮毫落紙如雲煙
（唐・杜甫「飲中八仙歌」）
（張旭は三杯草聖伝わる　帽を脱ぎ　頂を露わす王公の前　毫を揮って　紙に落せば雲煙の如し）

書体＝自由

習い方解説（五）

種谷萬城

今月は草書。杜甫詩『飲中八仙歌』から「張旭は三杯飲んで書く。草書の聖。王公の前でも帽子を脱ぎ、頭を露わにする。筆で揮って紙に落とせば、雲や霞が沸き起こるかのようだ。」と詠った個所を題材にしました。張旭は自由奔放な風格の草書の名人です。草書の字形を確りと学び、その上で、思いっきり筆を揮って下さい。

※タテ形式に限る

漢字条幅規定　秀級以下【九月十五日締めきり】　用紙　小画仙紙半切

川島舟錦選書

古墨軽磨満几香　硯池新浴照人光
（趙孟頫）
（古墨軽く磨すれば几に満ちて香ばしく　硯池新に浴し人を照らして光る）

書体＝自由

習い方解説（五）

川島舟錦

「書は人なり」などなど、心を清くして、真摯に取り組む姿は美しく、鍛錬を積むほどに「書」の奥深さを理解することとなり、道のはるか遠いことを知る。年齢を重ねることは容易いけれど「書の年輪」を刻むことは、至難の業であり、苦しきことのみ多かりき…。

ペン字規定【九月十五日締めきり】

大隅晃弘選書

五位が夢想してゐた「芋粥に
飽かむ」事は、存外容易に事実と
なって現れた。その始終を書かうと
云ふのが、芋粥の話の目的なのである。
芥川龍之介「芋粥」より　晃弘書

用紙＝はがきの大きさ（14.8×10㎝）、白色のもの、黒インク使用のこと

書体＝自由

習い方解説（五）

大隅晃弘

前回に続き、細字用の万年筆を用いての書作です。万年筆やボールペン、サインペン等、いわゆるペン字といわれる硬筆を学ぼうとする際、鉛筆での基礎訓練が欠かせないのではないかという考えを、ここ数年で抱くようになりました。

本誌『ペン字規定』では、「黒インク使用のこと」とあり、鉛筆での書作は認められませんが、折に触れて鉛筆で書写することをお勧めします。鉛筆の硬度は様々ですが、きめ細かく、比較的軟らかな4B程度が扱いやすいでしょう。適度な太さ、紙面との確かな筆触、起筆、収筆や転折での細部にわたる処理等、毛筆で身に付けた用筆法を、硬筆へと発展できる最高の筆記用具といえるでしょう。

手島右卿が48歳の頃に残したとされる、灌頂記の鉛筆臨書があります。鉛筆の芯の様々な面を駆使し、原本に忠実な骨格をそのままに、自在な運筆の生々しさを表現した名品です。硬筆（ペン字）と毛筆は、相反する別物ではありません。毛筆で培った書字構成や用筆法を、微細な筆触が捉えづらい硬筆でも生かせるような意識と感覚が必要です。

※落款（自分の名前）を必ず入れる。

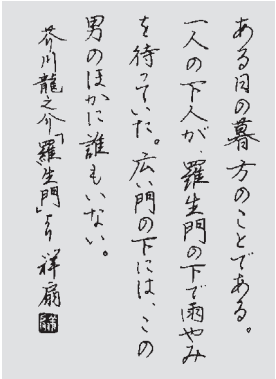
今月のホープ作品各部総評

NO.686

ペン字部　師範　佐藤　祥扇

切れのある引きしまった見事な線質で、最後まで一貫したリズムで表現された躍動感溢れる作品。

◎ペン字部総評　誤字も少なく、リズムよくまとまった作品が多かった。文字の大小、行間余白で作品の立体化に工夫を。（孝予評）



漢字条幅部　師範　板橋　恵泉

軽やかなリズムで、更に柔らかな筆致が調和した作。無理のない自然な流れが爽快さを感じさせる。

◎漢字条幅部総評　書体書風の多様さを研究する上で半折条幅は効果的で基本スタイルである。積極的な活用を期待する。（大雲評）

前衛書部　特選　茂木　絢水

瞬間を象徴するような造形を飛沫と余白でさらに印象付けた魅力ある作品。

◎前衛書部総評　用紙を考えるのも構成上大切な事柄で、その点で残念な作品もありました。（慧香評）

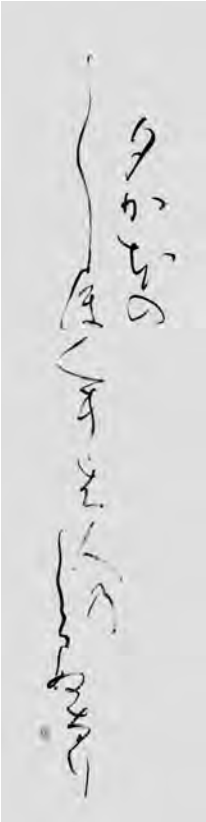
現代詩文書部　特選　草刈　眞華

雨粒をまとう山茶花の美しい情景が感じられる秀逸な作品。

◎現代詩文書部総評　濃墨で練度の高い作品多し。潤渇の変化も期待します。（掃雪評）

かな条幅部　師範　大和田紀江

控えめで総てのバランスがよく、格調高く仕上がっている。用紙の選び方が抜群です。捺印は丁寧に！

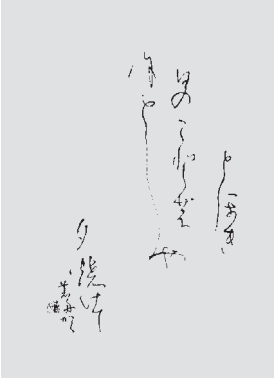


◎かな条幅部総評　字が過大、墨量過多の作品多く残念。参考手本からは過剰でない美しさを十分に把握することが大事です。（明子評）

かな部　師範　三田　蒼舟

書き手の鼓動が伝わるリズム感が白眉で、バランス感覚に秀れる。料紙を用いて更にオリジナルを！

◎かな部総評　料紙を用いる方が多くなり好ましいが、墨色が濃すぎると品を欠く。かなのリズムは繰り返しにより出ます。（洋子評）



漢字部　師範　土屋　恵仙

隷書の書法に習熟し、字形、筆法が安定。柔毫筆で蔵鋒による渇線は味わい深く、完成度高く上質。

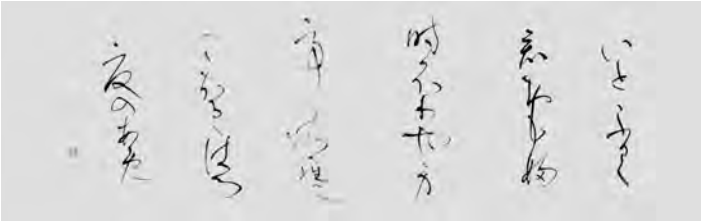
◎漢字部総評　上級は参考手本による行書作品の他に、個性的な作風の創作も見られた。古典学習と創作の両立が肝要です。（萬城評）

今月の

特別研究部優秀作品（特選）

選評　辻元大雲　最首翠風　奥田瑞舟　山口仙草

かな（如月）　治田芳江「いと深く」



治田芳江書　53×170㎝

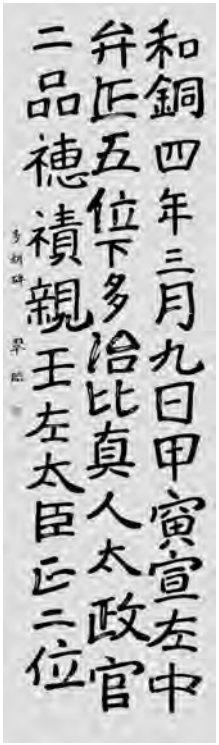
◆美しい料紙に運腕大きく心地よい。横作品の豊かな呼吸と余白の美しさに心ひかれる。（瑞舟評）

◆行間を思いきり空け、明るく爽やかな気分を醸し出す。線の切れ味がリズミカルな雰囲気に合っている。（大雲評）

◆恋の歌らしい美しい表現が料紙の水色、銀砂子と相俟って見る者を酔わせる逸品である。（翠風評）

◆シャープな書線で余白をたっぷりとり横作品として安定した作品。さらに墨量の変化がほしい。（仙草評）

臨書（紅瑤）　金井みどり「多胡碑」



金井みどり臨　180×50㎝

◆のびやかで懐抱の広い、大らかな表現に好感。率直な書きぶりと自然な行のゆらぎが魅力的な作。（大雲評）

◆まじめな多胡碑への取り組みに好感がもてる。文字配置もよくまとまっている。落款に配慮されたい。（仙草評）

◆素朴な表現は原碑に近いものを感じる。けれん味のない臨書の原点に立つ作品は難しいものだが。（翠風評）

◆円筆のむずかしさが自然に表現されていて脱帽。音楽は何を聞いての執筆か。規模の雄大さを称賛。（瑞舟評）

現代詩文書（千葉）　渡辺秋湖「夏の風」

渡辺秋湖書　136×70㎝

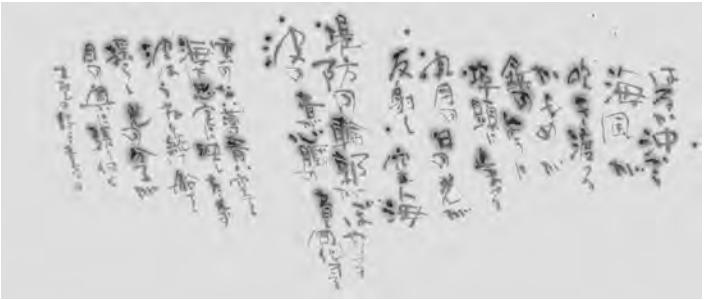
◆茶淡墨による潤渇の変化が大らかな広がりを生む作。自然な表現を買うがややムードに流れたか。（大雲評）

◆やわらかな墨色で、豊かな線質が自在に紙面に踊る筆力に魅力を感じる。（瑞舟評）

◆「響」「渡」など大字書としても通用する妙。2行目、やや平凡か。茶墨系の淡墨も美しい。（翠風評）

◆大胆な快い作で爽やかな響が感じられる作となっている。淡い墨色も美しい。（仙草評）

現代詩文書　（炎佳）　佐藤華炎



佐藤華炎書　　58×136㎝

「木村乙の詩より」

◆中央部へ盛り上げていく構成がリズムを感じさせ、青淡墨の潤渇の変化が紙面に動きを与えて妙。（大雲評）

◆墨の工夫、文字の造型の工夫、構成の工夫、全てを楽しんでいる姿が覗われる。墨の飛沫の効果も。（翠風評）

◆独特な墨色に滲みが加わり、墨の濃淡が美しい。変化に富んだ字形も生きている。（瑞舟評）

◆横作品の紙面構成が見事で、発墨もよくリズム感のある明るい作となっている。（仙草評）

前衛書　（紅瑤）　佐藤成美「紅」

佐藤成美書　　180×60㎝

◆強靭で躍動感のある書線と大胆な潤渇の変化が見事。気迫漲るエネルギッシュな作。余白処理も巧みな快作です。（仙草評）

◆サーファーが挑む大波のようなエネルギーを感じる。中央部の渦に吸い込まれるような熱気力。（翠風評）

◆ダイナミックな運筆がスケールの大きな世界を生み出している。濃墨による潤渇の変化に魅力あり。（大雲評）

◆躍動する生命感が伝わってくる。上部の重量感と中央部のスケールの大きな運動は紙面が狭く感じる。（瑞舟評）

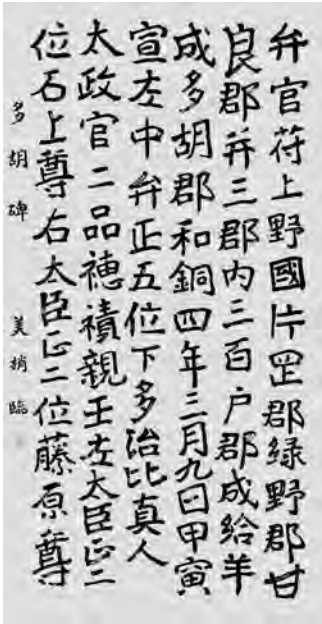
臨書　（大雲）　鷺山美梢「多胡碑」

◆原碑の真髄を自身の体内に取り込んだ臨書と見る。多字ならではの字間行間の変化も楽しい。（翠風評）

◆点画の肥痩の差もあまりなく、丁寧な運筆で原碑の特徴を捉えています。難度の高い古典と思います。（瑞舟評）

◆着実的確な臨書態度に敬服。原碑の自然な流れや大小の変化をよく観察して、見事な作です。（大雲評）

◆原碑に忠実に書かれており、円筆で古朴な表現で雄大な作品となっている。（仙草評）



鷺山美梢臨　　70×137㎝

創作の部（52点）
漢字―8点
かな―3点
現代―19点
篆刻―0点
前衛―22点
臨書の部（30点）
漢字―27点
かな―3点

総出品点数 82点

〈特選候補者〉

（創作の部）
「漢字」
花埜　高橋　奎媛
恵雅　板橋　雅邦
「かな」
奥田　小林　純風
「現代詩」
聚光　人見　橙月
玄穹　尾形　紅霞
玄穹　千葉　紅雪
うる　今関　心華
「前衛」
蓮紅　浅野　彩紅
白珠　相内　沙莉
玉州　遠藤　和香
秀水　坂井　初江
篤信　三浦　朱鳳
（臨書の部）
「漢字」
若葉　工藤　山房
もく　西川　藤象
蒼原　金濱　珀燁
大雲　江本　興舟
翠苑　氏家　久光
「かな」
千葉　平野　笛舟

漢字研究部
（多胡碑）

選評　稲垣小燕

今月のホープ作品

安藤叙孝

漢字研究部　特選　安藤叙孝

慎重な運筆で「多胡碑」の特徴を見事に捉えた作。線質に粘りと深さがあり全体に余裕が感じられます。日頃の臨書に対する取り組み方が窺えます。より一層の錬磨を重ねられますことを願っています。

◎漢字研究部総評

審査に当たって常々感じることですが、臨書するには臨書する心構えが大事であると思います。文字を書くだけでなく、その背景を知り、意味を咀嚼して解りにくい文字については辞書で調べる。そして、形をしっかりと捉えることです。その上で線質をよく考え、筆、墨、用紙を適するものを選ぶことです。今回も大雑把な作品が余りにも多いことを残念に思いました。臨書することの意義を考えて丁寧に学書する姿勢を身に付けたいものです。

白有紅有真睦裕麗多雅　玲
琴津霞月子月春峯佳玉　真
琴　香　　理　　　　　

幸三郎　久子　彩　　　

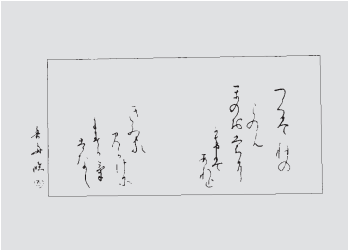
充ま虚一真　　　　　　
律き拙琴弓萠　　　　　

青恵公武篁　　　　　　
鳳風志男右悠　　　　　

かな研究部
（継色紙）

選評　松　村　くに子

今月のホープ作品



須　田　香　舟

良和絢清
泉子水耀

晃翠幸春
代綾泉華

千友万咏
峰香子艸
里

かな研究部　特選　須田香舟

筆圧の変化による線の太細と強い筆致が見事です。継色紙の書風を正しく観察し、よくその特徴を捉えています。古筆研究に対する誠実な姿勢がうかがえます。

◎かな研究部総評　全体的に良く臨書していますが、やや点画が曖昧な作品もありました。筆を立ててから運筆しないと誤字になってしまうことがあります。字母の確認を。

かな研究部成績表

特選

上大千紅琇竜高潮菊〃樹高清奥う幕白こ正椿高有菊仙松　玉紅　八う清やた若大大上大桜八玉白紅書た昌Ａ澄颯清宗大紅
泉阪葉風韻泉崎音月原崎月田る張扇こ華翠井秋月台村　松瑤　生る月まか葉阪拙泉雲草戸松鷺風游か苑Ｉ春葵月苑雲瑤

中中戸田竹高神齋斎紺近小小小木北神加加大榎石新熱阿青青藍　篠飯大田梅工上佐根堀苗市長森福庄小吉堀宇後境茂礒須
村西村畑内橋宮藤藤野藤峰林林村村田藤瀬島田川井海久木木澤　田高和玉津藤林藤岸切代川谷谷田司林田江田藤野木貝田
シ　寿美　美　明　澤　恵　由　佳　川　万　川
ゲ恵博美智雅玉杏　遊淑加嘉純順恵典翠日昌和洋恵桃隆松葵白　美幹紀哲代山萩陽正幸佳紫千友里咏晃翠幸春良和絢清香
子子舟子子泉枝邑功山子子江風子舟子陽夏子子子翠華月郷珙　子生江子子房渓子子雲恵泉峰香子艸代綾泉華泉子水耀舟

佳作（60音順）

蓮も長蘭樹玉白土遊澄秀も玄春旭竜琇　大蕙澄京墨祥千枝華大雲玉澄も誠澄Ａ花日大水大大松高　芳椿高椿声白石高前椿東高
紅く月鼎原松珠気雲春水く穹汀老泉韻　雲書春橋花紫葉苑祥雲溪藻春く和春Ｉ舞新阪海拙阪村陵　蘭翠真翠香露習崎橋翠向崎

本福平林早橋西西西浪富戸千多高泉砂鈴鷺坂齋近小北菊金加片香荻小岡鵜宇伊伊石生飯荒天青會　渡綿山安宮南松松別平皇根
田富山　坂本山澤澤川澤部葉田橋水岡木山本藤藤口村地井藤山川原川部澤井藤藤橋駒泉木羽木木　邊井岸嶋内　丸浦府山山津
さ　理　久　登　多　な真眞　か
美恵だ雅梅紅葵瑠彩秋恵藤陽美真龍裕睦美里翠松智志泰美雅恵翠玉輝藤琴楠寿悦嘉萩洋孫恵玉勇　信お奈砂成玉愛玉信っ芝飛
雪子子子艸霞龍美峰花子風子子黛宝子心梢美香春子子峰文芳風溪藻峯瓊舟麗子子子花子功子枝介　溪子美子子枝石江子子香龍

入選（60音順）

澄Ａ明八秀た硯竹墨英大蒼大高こ千〃大正高生大長蘭黎正青大明伏梅華白大高こ東土正澄久や蘭八誠正こ高垤も東京　琇書無竹蘭五こ
春Ｉ漢雲畝か水美友峰阪陽阪陵だ葉〃雲華崎大阪月鼎明華峰阪漢華桃仙鷺雲真だ総気華春賀ま鼎街和華だ崎和く仙橋　韻游門扇鼎葉だ

新清嶋七椎猿佐櫻佐斉後込小小小河高草木北北岸木川金加鹿小小小大大遠梅梅薄臼鵜植岩伊市石石石五飯安新阿東　吉遊山柳森森宮
行水　條名渡々田川藤藤山林滝島野武刈原村又本暮崎子藤島野澤熊西串木藤山原田井澤田渕東川渡崎川十島藤井部　川佐中　田川
内由与　木　ふ　奈　喜　智　サ　知嵐
瑞紀祢裕光篁雅智紅早喜美萩久み恵玄眞輝欣春萩典優津春裕萩和代一恵歩志久虹春綾李紅祥京チ翠甘津佳律裕藤緑花　幸一清隆直睦洋
華子子美子右芳舟輝笛萩艸江恵子子城華子子峡茜子子希菜子光子子美子佳扇子祥緑乃名雨苑子子径雨子栄子子雪玲子　恵榮玉扇子子子

選外190名略

如春高ふ明幕東幸や玉高竹松調硯菊大白幕長琇生〃土千大上琇た青高泉大一大雲上耕麗大春大た高一祥大泉立玉天澄上青玉蕙白宮土正
智丁汀井み漢張伯扇ま川崎美村布水月雲露張月韻大〃気葉雲泉韻か蓮陵会阪葦雲溪泉雲澤阪汀阪か真宮紫雲会精松璋春泉峰川書露城気華

綿渡吉吉吉吉山山谷矢八茂武宮宮三松松増眞藤深平平日早林浜沼丹永中中中仲中土富冨渡徳樋鶴鶴敦積辻千田田高高平関関春鈴杉杉
貫邉田田田川本本口知口木木藤澤崎浦村島田塩本谷山山高部　野田羽田村村林西尾井田田子田泉淵田賀田　田中口橋草　根口原木田浦
ゆ富千　裕　橋　登　美　美　真　澄　香　千　本　美
智真り美鶴素真梅律美登紀翠蕙草英道陽翠佳栄喜梨優彩右　奈永奎恵時由一清游恵弘瑶萩紀萩雪亜雅美雅洋白耶代幸代杏代芳慶昌祥幸
子子か子子香紀香子子江舟芳睦秋明子子舟子子恵乃子華真朗子篁心子子美琴香溪子枝翠彩子峯篁希裕恵雲子香衣子苑子華子枝子恵風子

平成30年度

公益財団法人 書道芸術院新役員

（６月の理事の任期満了に伴い、役員の変更がありました。新役員を紹介します。）

理事　川島舟錦

理事　尾形澄神

顧問　大野祥雲

監事　半田藤扇

監事　髙田幽玄

理事　津田海仙

評議員　三浦鄭街

評議員　佐藤莱扇

評議員　大石仙岳

評議員　生田翠龍